社会科におけるワンポイント巡検から発展した事後学習の実践と成果

The Practice and Achievement of the Learning
after the Geographical Excursions in Social Studies

七里　広志
Hiroshi SHICHIRI
滋賀大学教育学部附属中学校

＜キーワード＞　地域調査の手法　ワンポイント巡検　カリキュラム・マネジメント　探究学習　総合学習

1. 課題の所在と研究の概要

中学校社会科の学習において，2008 年版の学習指導要領における「身近な地域の調査」，および 2017 年版の学習指導要領における C（1）「地域調査の手法」[1] に関し，実際に校外に出て野外調査を行うという活動は，1958 年版の学習指導要領から引き続き記載があるにもかかわらず，多くの学校で十分に実施されていないと実感している。しかし，学習指導要領に示されている上は，野外調査は本来，必修または実施が推奨されるべきものだと捉えられる。

これまでの報告では，まず滋賀県内や，全国の附属学校の中学校社会科教員を対象に質問紙調査を行い，学習における地域調査の扱いについての状況を捉えた[2]。すると，実際に校外に出ての野外調査の実施率は，滋賀県教員 8.6％，附属中教員 31.8％にとどまり，低い状況にあることがわかった。野外調査を含む授業の実施を妨げている要因としては，指導方法の不安よりもむしろ授業時間や教材研究の時間の確保など，時間的制約を挙げる回答者が多かった。

岩本（2021）[3] は，こうした野外調査を含む質問紙調査の報告を整理し，「身近な地域」において地形図の活用の割合は高いものの，野外調査の実施率が低調なことと，教員の問題発見力が備わっていないこと等を指摘している。

時間的制約を軽減して社会科の授業で野外調査を実施できるように，「地域調査の手法」の単元として松岡ら（2012）によって提唱されたワンポイント巡検[4] を行い，地理的な見方・考え方を高めることとした。岩本（2021）[5] も，ワンポイント巡検について実行しやすい計画に基づき，実践をしていく点を評価している。

学習は 3 時間で展開した（表 1）。わずかな時間ではあったが，ワンポイント巡検を実施することで，生徒への効果は大きかった。地域的特色について根拠を挙げて考察する力がつき，その力は比較観察レベルから相関観察レベルへと高まることを示した。

しかし，ワンポイント巡検に関わる報告は，中学校に限ると地理的分野「身近な地域の調査」「地域調査の手法」に関わるものが多い。地理的分野の一単元の学習だけで終わると，時間的な軽減を狙っているだけに，その効果は限定的となると考える。ワンポイント巡検を実施しないよりは実施する方が成果は上がるが，ワンポイント巡検だけだと生徒が野外調査の技能を身にはつけても，地域の課題に対する思考・判断まで深めたり，学びに向かう力・人間性を高めたりすることまでにはつながらないという懸念が起こる。あわせて，ワンポイント巡検をふまえた上で，時間の不足の課題がある中で事後の学習をどう練って深めるか，という懸念も挙げられる。八田（2012）[7] は，総合的な学習の時間におけるワンポイン

表 1　本校で行った，ワンポイント巡検を含む「地域調査の手法」の単元の概略

【単元を貫く問い】
「学校周辺はどんな地域なのだろう？」

【単元のねらい】
地形図の読図の知識や技能を身につけた上で，身近な地域（学校周辺）の野外調査（巡検）によって景観からわかる情報を読み取り，それを根拠として地域的特色を整理して論述できる。

なお，地理的な見方・考え方につながる地理的特色を読み取る視点は，次の四つとする。
（A）地形・防災，（B）歴史・文化財，
（C）経済・産業，（D）交通・他地域との関連

【単元の流れ】（3 時間）

第 1 時
・地形図の読図の知識や技能を身につける。
・地形図を見て学校周辺がどんな地域なのかを捉える。

第 2 時
・野外調査（ワンポイント巡検）に出かけて，景観からわかる身近な地域（学校周辺）の情報を読み取る。

第 3 時
・身近な地域（学校周辺）の野外調査によって景観からわかった情報を根拠として地域的特色を整理して論述する。

（七里(2021)[6]）

ト巡検の事例を報告しているが，あくまで総合的な学習の時間における取組で，地理的分野の学習と総合学習をつなげるという発想ではない。

2017 年版の学習指導要領では，カリキュラム・マネジメントの考え方が提唱された。これによれば，意図を持っておれば社会科の授業で学習しきれないことを総合学習や学校行事で継続して補完的に学習させることができる。すなわち，社会科の授業で「地域調査の手法」の単元としてワンポイント巡検を行い，地理的な技能を習得させた上で，後の総合学習や学校行事で「地域の在り方」の単元にあたる内容を扱い，活用したり，探究したりさせ，生徒に地域について深く考察させることができる。今後，実際に校外に出て野外調査を行う実践を増やして行くには，この方法が最も現実的で，汎用性があると考える。

本稿では，ワンポイント巡検を軸としてカリキュラム・マネジメントを意識し，事後の校外学習や総合学習でも地理的な見方・考え方を育む学習を継続し，学習を発展させた実践を報告する。校外学習や総合学習について，目的を持たせたより意義深い活動にでき，野外調査の時間を社会科の授業だけでなく効果的に生み出すことができると価値付けた。その上で，生徒の成果物から，効果を分析した。

2. ワンポイント巡検から発展した事後学習

(1) 事後学習の構想

今回のワンポイント巡検を含む「野外調査の手法」の学習を，1 年生は 2018 年 12 月，2 年生は 2019 年 1 月にそれぞれ実施した。その後も，カリキュラム・マネジメントの発想により野外調査の要素を継続して学習させる（図 1）。

すなわち，1 年生においては，冬季休業中に，自宅周辺の身近な地域的特色を読み取る課題を出し，景観を読み取る練習をさせる。次に，1 年京都校外学習（3 月）において，訪問先だけでなく，訪問地周辺の景観情報から地域的特色を読み取らせるようにする。2 年生でも，沖縄修学旅行（2 月）において，同じように訪問地周辺の景観情報から地域的特色を読み取らせる。また，希望する生徒を対象として，学年末休業（春季休業）中に膳所城下町や旧大津城周辺で半日程度の野外調査を実施し，景観を読み取る練習を行う。そして，次年度の総合学習で，以前の生徒より景観を読み取ることを活用した学習成果が出ることをねらう。

なお，本稿では 1 年生の冬季休業中の課題を「地域調査の手法」における単元内での学習のまとまりとして捉え，事後の学習としてはその後の実践と結果を報告する。

1・2 年社会 身近な 地域の調査	身近な地域(学校周辺)の野外調査(ワンポイント巡検)を行い，景観からわかる情報を根拠として地域的特色を整理して論述する。(3 時間)
1 年冬季休業中の課題	自宅周辺の野外調査に出かけ，身近な地域的特色を読み取り，景観を読み取る練習をする。
↓	
1 年京都校外学習	訪問地周辺の景観情報から地域的特色を読み取る。
2 年沖縄修学旅行	訪問地周辺の景観情報から地域的特色を読み取る。
長期休業中 (春季休業)	希望する生徒のみ膳所城下町や旧大津城周辺で巡検を実施し，景観を読み取る練習を行う。
↓	
総合学習 (各学年)	調査の際に，訪問地だけでなく周辺の景観情報から地域的特色を読み取る。

図 1　ワンポイント巡検を軸にした事後学習の構想

(2) 希望する生徒を対象とした特別授業による巡検

社会科の授業において 1 時間でワンポイント巡検を実施して，中には野外調査や地域の景観に関心を持った生徒もいるだろう。全員対象とするのではなく，希望者制の巡検を仕組み，少人数でも参加者を募ることができたら，参加生徒の地形図や景観から地域的特色を考察するという地理的な見方・考え方はより深まるし，その後の総合学習などの活動の際にも，地理的な見方・考え方に関してリーダーとして他の生徒に広めていけるのではないかと期待した。そこで，学年末休業時に「特別授業」として 1，2 年生の希望者を対象として巡検を計画した。

計画していた巡検の概要を示す（図 2）。2 日間にわたっ

2020 年 3 月 25 日(水)「旧膳所城下町の巡検」
・学校での講義　12 時 30 分～13 時 00 分
巡検　13 時 00 分～15 時 00 分頃
(学校-旧東海道-旧膳所城下町-膳所公園-膳所神社-膳所本町駅)
京阪電車膳所本町駅で解散
・概要　授業で実施した巡検では，学校周辺の膳所城下町の痕跡を見た。今回は，さらに旧膳所城周辺や膳所公園に残る痕跡を訪ねることで，膳所城があったころの膳所の様子を探る。

2020 年 3 月 26 日(木)「附属中旧東浦校舎跡・大津城跡の巡検」
・学校での講義　12 時 30 分～13 時 00 分(講義室)
巡検　13 時 00 分～15 時 30 分頃
(学校-膳所駅-(JR)-大津駅-附属中旧東浦校舎跡地-川口公園-スカイプラザ浜大津)
京阪電車浜大津駅で解散
・概要　膳所城は，もともと大津城が移されて成立した。1600 年の関ヶ原の戦いの時に，大津城は重要な役割を果たしている。しかし，その後大津城は廃されて膳所城に移ったため，膳所城以上に痕跡はない。わずかに残る痕跡を探し，大津の町がどのようにつくられてきたのかを探る。また，大津の街が形づくられる中で，大津駅前に附属中学校があった時期がある(旧東浦校舎)。その跡地も訪ねる。

図 2　春休み（学年末休業日）に実施予定だった希望者対象の巡検のルートと概要

て計画し，いずれも春季休業中に半日部活動をする生徒を想定し，午後に２～３時間程度で回ることのできるコースを考えた。昼食を済ませてから学校で 30 分間程度，座学で簡単に基礎的知識を講義して，巡検に出る。1 日目は，学校から膳所城下町や膳所城の痕跡を回るルート，2 日目は，大津市の中心地である大津城の痕跡を探るルートである。巡検先で解散とする。参加はどちらか 1 回だけでも，あるいは 2 回とも参加してもよいとした。

新型コロナウィルス感染症拡大に伴う臨時休校期間になったため，希望生徒に募集をかけて巡検を実施することはできなかったが，3 月 25 日に本校社会科教員を対象とした研修として，予定していたコースを少し変更し半日の日程に集約して巡検を行った。

生徒の変容をはかる方法として，参加生徒のワークシートの分析と，この後の学習活動におけるレポートでどのように地域的特色を読み取ったかについて，不参加生徒と比べて分析することを予定していた。

(3) 1 年生京都校外学習

2019 年 12 月の 1 年生の授業のあと，2020 年 2 月 28 日に京都校外学習を予定していた。計画していた校外学習の概要を示す（図 3）。本校では，2016 年度より 1 年生の校外学習について，京都をフィールドとして実施している。まず，1 年生の授業のあと，12 月に滋賀大学教育学部社会科教育講座の安藤哲郎准教授（人文地理学）を招いて，京都における野外調査に関するガイダンスを，京都の地形図を用いて実施した。次に，4 ～ 6 名程度のグループで探究テーマを決め（表 2），校外学習当日はグループで決めた京都市内の各地を一日かけてまわる。各グループが必須で訪問するチェックポイントは 1 か所のみに絞り，生徒が自主的に探究テーマに合わせて野外調査をできることを目指している。カリキュ

2020 年 2 月 28 日(金)
・京都駅集合　8 時 30 分
　グループ学習 9 時 00 分～15 時 30 分
　　(グループごとにテーマを決めて計画を立てる。3 か所設けるチェックポイントのうち，一つは訪れる。)
　京都駅解散　15 時 50 分
・一日バス･地下鉄乗車券を配布する。
・昼食はグループ単位でとる。
・デジタルカメラとレンタル携帯電話をグループに 1 台持たせる。

図 3　実施予定だった 1 年生京都校外学習の概要

表 2　1 年生京都校外学習で各グループが設定していた探究課題の年度による比較

2018 年度(ワンポイント巡検を実施せず)		2019 年度(ワンポイント巡検を実施)	
1A-1	○人気の観光スポットと穴場の観光スポットを比較しよう！	1A-1	○建築技術のつながり
1A-2	○京都にしかない伝統文化と寺社の関わりを調べる	**1A-2**	○京都の寺社仏閣，建てた歴史・**場所**・意味について調べる
1A-3	○梅小路公園は，京都にとってどんな存在か	1A-3	○京都にある寺や神社を比較し，相違点を学ぶ！
1A-4	○百人一首と現代京都の観光業の関わり	1A-4	○世界が注目する京菓子の秘密
1A-5	○京都の建造物の共通点を見つける	**1A-5**	○京都の**景観**を守る取り組みについて調べよう
1A-6	○京都の寺社にゆかりのある伝統的なお菓子について調べる	**1A-6**	○河原町三条の大通りの**町並み**と祇園の昔の町並みを比較する
1B-1	○この差って何ですか？ ～京都と奈良～	1A-7	○京都にゆかりの深い文学作品について
1B-2	○京都の人気にせまる!!	1B-1	○京都の歴史的建造物について
1B-3	○錦市場と三条通りに売っているものや観光客の目的の違いを調べよう!!	**1B-2**	○**町並み**や建造物から読み取れる時代の変化
1B-4	○大阪万博・東京五輪で外国人観光客が増加するだろうが，どのような問題が起こるのか？	1B-3	○天皇家や幕府と京都の関連性
1B-5	○観光客が集まるところの魅力を探る	1B-4	○京都の食文化について
1B-6	○方言について調べよう	1B-5	○多くの人は何のために西国三十三所の寺に来るのだろうか
1C-1	○有名な歴史的建造物はなぜ有名なのか？	1B-6	○京言葉について探る
1C-2	○京都の**町並み**と印象に残る方言を探る	1B-7	○京都に関わりのある文豪
1C-3	○観光地になった京都の変化について	1C-1	○千利休ゆかりの地巡り
1C-4	○滋賀に足りない京都で行われている観光客へのサービスを知ろう	1C-2	○世界から愛される京都の世界遺産
1C-5	○京都の観光地の立地条件は良いのか	**1C-3**	○有名な寺と周りの文化の関連
1C-6	○京都のロケ地の特徴について	1C-4	○京都の食と外国人観光客
		1C-5	○京都の人気スポット巡り
		1C-6	○京都の人気の観光地の秘密
		1C-7	○京都と天皇の関わり

（ゴシック文字は，訪問地周辺の景観を研究課題にとりいれたととれるグループを指す）

ラム・マネジメントを意識し，全校で実施する総合学習BTや各教科の探究的学習を経て，3月に1年生の探究的活動の集大成と位置づけた学習である[8]。

しかし，これまでの本学習において，生徒はグループ研修中に神社や仏閣等の訪問先は観察をしても，その訪問先はどういった地理的条件の場所にあるのかを考察したり，また訪問先に通じる道や訪問先周辺の景観に着目したりすることはなかった。そこで，ワンポイント巡検を経験した生徒たちは，その成果を活かし，地形図から訪問先の地理的条件を読み取ったり，訪問地だけでなく周辺の景観から情報を読み取ったりできるように変容することを期待した。確認する方法として，ワンポイント巡検による社会科の学習をしていない2018年の生徒の事後レポートと，ワンポイント巡検を社会科の授業で行った2019年度の1年生の事後レポートとを比較し，訪問先の情報ではなく，地域的特色に触れた情報がどの程度増えているかをはかる予定だった。

校外学習も当日は中止になったので事後レポートで比較することはできないが，事前学習を進めていたため，各グループの探究テーマを比較することはできる。表2は1年生の段階でワンポイント巡検を実施していない2018年度1年生と，ワンポイント巡検を実施してから京都校外学習に臨んだ2019年度1年生の探究課題の比較である。探究課題を見ると，2019年度1年生においても7割程度のグループで神社や仏閣等の訪問先をポイントで見るという，2018年度1年生と同様の傾向がある。しかし，3割程度のグループで，訪問先周辺の景観を含んだ観察から地域的特色を読み取ろうとする傾向がある。その3割程度のグループにおいて，「景観」「町並」「場所」といった野外調査に関するキーワードが，2018年度1年生では一つだけなのに対し，2019年度1年生は4グループに増えている。グループの数そのものが2019年度は多いが，グループの増加率を踏まえてもこうしたキーワードの増加は認められるだろう。すなわち，ワンポイント巡検を実施しておくことで，京都校外学習において，訪問地を点として捉えるのではなく，周辺や地域の景観を根拠として地域的特色を考察する生徒が増えたと言える。

(4) 2年生沖縄修学旅行

①沖縄修学旅行における探究的学習活動の概要

2020年1月の2年生の授業のあと，2月14日に沖縄修学旅行[9]において，グループ別研修を実施した（図4）。本校では，2016年（2015年度）より2年生の修学旅行の訪問先を沖縄とし，その日程の中でタクシーによるグループ研修を実施している。そこでは3～4名程度のグループで探究テーマを決め，グループで計画した訪問先について沖縄本島南部地域をフィールドとして一日かけてまわる。この際も1年京都校外学習と同じく，各グループが必須で訪問するチェックポイントは1か所のみに絞り，生徒が自主的に探究テーマに合わせて野外調査をできることを目指す。カリキュラム・マネジメントを意識し，2月に2年生の探究的学習活動の集大成と位置づける[10]。

2020年2月13日(木)　修学旅行3日目
・南城市グスクロード公園出発　11時00分
　グループ学習 11時00分～16時00分
　　（グループごとにテーマを決めて計画を立てる。3か所設けるチェックポイントのうち，一つは訪れる。）
　那覇市国際通りのホテルに集合　16時00分
・移動は，一日チャーターしているタクシーを利用する。
・昼食はグループ単位でとる。

図4　2年生沖縄修学旅行・グループ別研修にかかわる探究学習の概要

本学習においても，前年度までの生徒はグループ別研修中に訪問先は観察しても，訪問先の地域的特色や訪問先周辺の景観に着目したりすることはなかった。そこで，ワンポイント巡検を含む「地域調査の手法」の授業の際に，実際に歩いて景観から地域的特色を読み取ることについて，今後の校外学習や総合学習にも活用してほしい旨を伝えた。ワンポイント巡検を経験した生徒たちは，その成果を活かし，訪問先の地域的特色や訪問先周辺の景観から情報を読み取れるように変容することを期待した。その中で，沖縄修学旅行の前に，沖縄南部地方の25,000分の1地形図を印刷して配布し，生徒が地形図上で訪問先を確認したり，地形図から景観を想像したりできるようにした。

②『沖縄修学旅行探究のしおり』内の「各教科での学習を記録しよう」に関する分析

成果物から生徒の変容を分析する方法として二つ準備した。

一つ目は，生徒が沖縄修学旅行に向けた事前の探究学習において活用していた『沖縄修学旅行探究のしおり』（以下「しおり」）の中に，「各教科での学習を記録しよう」というページがあり，その枠内に修学旅行後に沖縄の景観から気づいたことを二つ書いて提出するように指示した。これは，ワンポイント巡検を含む「地域調査の手法」授業時に事後課題の一つとした。その際には，修学旅行中に沖縄の景観を注意して見ておくこと，「これは沖縄の特色だ」と思った景観を二つ取り上げて紹介すること，とくに学校周辺とは違う特色を取り上げること，四つの「地形・防災」，「歴史・文化財」，「経済・産業」，「交通・他地域との関連」の視点を意識すること，「〇〇があるので…」または「〇〇ないので…」という文型で，箇条書きで書くこと，いつ・どこでという情報も入れること等を条件とした。ワンポイント巡検で得た，地理的条件や訪問先周辺の景観から情報を読み取ろうとする見方・考え方について，沖縄修学旅行とつなげることを意識させたかった。

評価の結果を示す（表3）。2020年2月に修学旅行は実施できたものの，新型コロナウィルス感染症の拡大

に伴い，事後学習の実施期間中に臨時休校期間に入ってしまった。事後学習でもしおりを使っていたので事後学習が終わるまでしおりを集めることができず，しおりの提出そのものを１か月後の登校時にせざるを得なくなり，課題に対する即時性はなくなった。こうした回収時の混乱のために，しおりの提出そのものができなかったり，提出していても該当課題に取り組めていなかったりする生徒が 106 名中 23 名，表３の⑩～⑫のように条件に合わせた論述ができておらずＣ評価にとどまる生徒が４名いたのは残念だった。

その中でも，条件に合わせて論述できている生徒は，⑥や⑨のように，目に見えたものからその背景を読み取ろうとしていることがわかる。④，⑤，⑦，⑧は景観から地理的な背景を読み取ろうとしているし，①～③のように，景観から地域的特色まで考察している事例もあった。また，ワンポイント巡検時に強調した表１の四つの視点で景観を読み取っているものが多いことから，ワンポイント巡検で学んだことを活かして修学旅行での景観の読み取りができたと言える。

さらに，箇条書きで二つ以上の論述を書いた生徒は，⑤を除き，四つの視点のうち，複数の視点に触れている。箇条書きで二つ以上の論述を書かせることでより広い視

表３　2019 年度２年生がしおりに総括した，沖縄の景観から気づいた記述の評価

(N=106)

評価	評価基準	人数(人)	記述例 (A～D は表１で示した四つの視点に対応)
A○	「身についた力」について整理して書いている。「探究テーマに関わって参考になること」について，「○○があるので…」または「○○がないので…」といった文型で２文，箇条書きでまとめている。その際，景観や事象から，地域的特色に関わる考察ができている。	9	①2-3 日目，フィールドワークなどを通して見ると，城周辺は山で，傾斜が強く，海が見えたため，城を中心に交易とともに発展したのでは。全体を通して川をあまり見かけなかったため，水よりも風に対しての対策が多いのではないか。(A･B) ②3 日目　沖縄市内には石垣(グスク)やガマ(壕)があちらこちらに残されているので，歴史的な跡を大切にしている町といえる。国際通りには，外国語表記の看板や派手な見た目の店が多くあるので，(特に外国からの)観光客が多く，第三次産業が盛んな地域といえる。(B･C･D) ③3 日目国際通りには，おみやげ屋さんが多くあるので，昔から外国との関係性があった。2 日目さんさんビーチには，砂浜があるので，土地がまわりより低く，災害時には，注意が必要。(A･C･D)
A	「身についた力」について整理して書いている。「探究テーマに関わって参考になること」について，「○○があるので…」または「○○がないので…」といった文型で２文，箇条書きでまとめている。	59	④屋根の上に大きな貯水タンクがある家が多かったので，雨水をためて使っている家が多いのではないかと思った。何回もカーブがあったから，戦の時に攻めにくいようになっていたのではないか。(A･B) ⑤3 日目のフィールドワークのとき，町の中で，白い家で，タンクのついた家があるので，水がすくなく，暑いということがわかる。3 日目のフィールドワークのとき，タクシーで移動したから，交通量が多くて，車社会ということがわかる。(D) ⑥フィールドワークで 3 カ国語の看板があるので，外国人にも分かりやすい。海があるので，マリン体験ができる。(A･C)
B	「身についた力」について整理して書いている。「探究テーマに関わって参考になること」について，「○○があるので…」または「○○がないので…」といった文型でまとめている。	11	⑦修学旅行を通して，沖縄は川が少なく短いことが(地図からも)分かったので，水不足になったことも考慮し，各家に貯水タンクがあるのだと考えられる。(A) ⑧あざまさんさんビーチには，サンゴのかけらが多く落ちていたので近くに大きなサンゴ礁がある。(A) ⑨国際通りでは，非常に多くの店があるので，それぞれの店が物を買ってもらおうと割引などを行っており，価格競争が起こっている。(C)
C	「身についた力」について整理して書いている。「探究テーマに関わって参考になること」について，条件に合わせたまとめの文章になっていない。	4	⑩沖縄の地域的特色について知れた。 ⑪その場所の自然などを知って地図で比較できる。 ⑫3 日目のタクシー研修で沖縄の景観を見る目が変わった。
－	(未提出または未記入)	23	

点で景観を読み取り，①～③のように地域的特色に関する考察を深めることができ，A〇の評価となる生徒もいることがわかる。

③グループ別修学旅行新聞に関する分析

二つ目は，2019 年度の 2 年生の事後におけるグループ別修学旅行新聞について，ワンポイント巡検を含む社会科の学習をしていない 2017 年度（2018 年）の生徒のものと比較する。グループごとに探究テーマを決め，事前学習と修学旅行当日に一日かけて調査したり得たりした情報をもとに，事後に考察を加えて修学旅行新聞を作成する。生徒は記事を分担して一人一つから二つ程度を担当する。比較の対象とする 2017 年度と 2019 年度の 2 年生は，どちらもほぼ同じ条件で修学旅行新聞を作成しているため，年度を越えた比較をするのに適していると言える。

生徒の作成した記事の分析にあっては，まず，記事の中心となる訪問先の情報について，パンフレットやガイドブックの説明をもとにした記事ではなく，実地にもとづく景観観察の様子のわかる部分を抽出した。次に，景観観察から地域的特色を読み取っている部分，移動時や複合的な考察等，特定の場所の景観に関わらず，複数，もしくは周辺の景観についても触れている部分を抽出した。これは「周辺部の景観や地域的特色まで踏み込んで考察した記事」として扱い，より深く地域的特色を考察している部分として評価した。なお，同じ記事の中でも二つの場所のことをとくに関連させずに書いている場合は，別の記事として抽出した。そして，抽出した記事の文字数を数え，2017 年度と 2019 年度の 2 年生で比較して表に整理した（表 4）。

すると，景観に触れた記事の合計数は 2017 年度 2 年生が 17 だったのに対し，2019 年度 2 年生は 22 と増加したことがわかった。この 2 年間に学年定員が 120 名から 108 名へと減少し，修学旅行のグループも 2017 年度 2 年生が 32 から 2019 年度 2 年生は 27 へと減り，さらに新型コロナウィルス感染拡大による休校に伴って修学旅行新聞が提出できなかったグループもあって新聞数が 25 となったことをふまえると，グループあたりの景観に触れた記事の数は増加したと言える。うち，周辺部の景観や地域的特色まで踏み込んで考察した記事についても 2 年間で 53％から 64％へと増加している。景観に触れた記事の平均文字数も 2 年間で 90.9 字から 142.8 文字へと 1.5 倍程度に増加している。

個々の記事例を見ても，2019 年度 2 年生は 2017 年度と比べて描写が具体的で，複数の景観の根拠を挙げ，関連させて地域的特色の考察へとつなげていく傾向が見られ，文字数が増えた分，地域的特色をより深く考察できるようになったことがわかる。

ただ，2019 年度の 2 年生でも景観の描写が出てこない記事も多数あるため，ワンポイント巡検の学習の効果は一定程度見られるが，すべての生徒に対しての効果というわけではない。

表 4　グループ別修学旅行新聞で景観に関する記事の比較

年度	2017	2019
景観にふれた記事の合計数	17	22
うち，周辺部の景観や地域の特色まで踏み込んで考察した記事の合計数	9	14
	53%	64%
景観にふれた記事の合計文字数	1, 545	3, 141
景観にふれた記事の平均文字数	90. 9	142. 8
グループ数	32	25
生徒数	120	108

(5) 総合学習 BIWAKO TIME（BT）における抽出生徒の分析

① BT において期待されるワンポイント巡検の成果

本校が取り組む BT は，全校体制で取り組んでいる総合学習である[11) 12)]。「郷土である滋賀」を学習フィールドとし，「学び方を学ぶ」調査研究型の学習を継続している。異学年合同のグループ活動による課題発見・解決学習や，夏季・秋季休業をはさんで 25 時間という長期にわたる学習を実施していることも大きな特徴である。なお，生徒の課題意識を調査して，意識の近い生徒同士を同じグループにするよう調整している。

例年，グループごとに校外活動を企画し実施させている。その際，これまではインタビュー活動に指導の力点を置いていたため，訪問先の景観や立地について，地形図を手にして気にかけたり分析したりするグループの研究は見られなかった。そこで，ワンポイント巡検を経験した生徒たちならば，校外活動の際に地形図による立地や景観観察による地域的特色の考察をするのではないかと期待した。

しかし，BT に関しても 2020 年度は新型コロナウィルス感染拡大防止のため，前半は統計資料を活用して個人研究をさせ，後半は個人研究を交流しながらのグループ研究を，原則として校外活動をしないなかで実施するという学習に切り替えた。そのため，ワンポイント巡検が総合学習にどう生きたか，といった分析について，生徒全体を対象としてエビデンスを得ることはできなかった。そこで，ワンポイント巡検の要素が一部見られた研究を進めた生徒に特化して，その成果を分析するとことした。

②抽出した 5 人の生徒の 2019 年度の取組と 2020 年度の BT における成果に関する分析

ワンポイント巡検の要素を少しでも取り入れている研究を行ったグループを中心に 5 名の生徒を抽出して，ワンポイント巡検の成果を示す事例として分析することした。各生徒について，BT の終了時に質問紙または聞き取りで調査を行い，ワンポイント巡検に関する学習のこれまでの成果や BT における成果と合わせて，学習の履歴を整理した（表 5）。

厳しい制約の中で校外活動に出かけたグループは三つあった。しかし，そのうち二つは，水質調査をテーマに

するグループが琵琶湖に水を汲みに行くことだけを目的とする等，ワンポイント巡検のねらいに関わる景観観察とは関係ないものだった。生徒Ｓと生徒Ｔのグループでは，景観の観察をもとに地域的特色を考察しており，授業で身につけた力を十分に活用していた。とくに生徒Ｓは，聞き取り調査から「大津は，住んでいる地域の景

表５　抽出した５人の生徒の 2019 年度の取組と 2020 年度の BT における成果との関連

生徒	2019年	2020年	2019年度のワンポイント巡検に関する一連の学習の履歴	2020年度のBIWAKO TIMEにおける学習の成果からの評価	2020年度のBIWAKO TIMEにおける質問紙や聞き取りからの評価
S	1年生	2年生	授業ワークシートの評価A ワークシートにおける質問紙調査の記述「巡検を行うときに，意識してみるポイントが分かりました。」 冬季休業中の課題は思考･判断･表現がAで景観観察から主に歴史と産業の視点で考察している。	個人での調査研究では，滋賀県の観光業と来訪者の変化について，京都府と比較して，統計資料から分析した。 グループの研究では，生徒Bらとともに「滋賀県の観光業を活性化させよう」というテーマに対して，大津のイラストマップを作成するために野外調査を行い，イラストマップを作成するのに中心的な役割を担った。	グループにおいてイラストマップを作成する担当だったため，グループとしては当初，土産物店の商品の並び方を見ることになっていたが，周囲の景観や道の様子も気にしていた。商店街に店が集まっているが，あまり知らない地域だったので，観光客目線で景観を見ようとした。大津は，住んでいる地域の景観と違い，地域の文化を大切にしていると感じた。昨年度の社会科の授業に関しては，野外調査やイラストマップ作成のために地図を読んだり，実際にイラストマップを作成したり，野外調査で視点をもって景観を見るという点において参考になった。
T	2年生	3年生	授業ワークシートの評価A ワークシートにおける質問紙調査の記述「フィールドワークをして地域の特色をまとめたこと。」 沖縄修学旅行のグループ別新聞では国際通りの店舗の様子に関して景観からの考察が見られる。	グループの研究では，「滋賀県の観光業を活性化させよう」というテーマに対して，生徒Aらとともに大津のイラストマップを作成するために野外調査を行い，リーダーとして中心的な役割を担っていた。	滋賀県の観光業について関心があったものの，グループでの学習まではイラストマップを作ろうとは思っていなかった。グループ活動が始まったときに，２年生の生徒Aが提案して，イラストマップを作ることになった。野外調査では，はじめ土産物店で販売されている商品の違いを見ようとしたが，大きな違いがなかったため，古い建物を模した外観に目が行き，イラストマップにも店の外観の写真を載せた。土産物店以外の景観はあまり注目していないが，商店街の景観に着目したところ，活気がないため，イラストマップに採用できないと考えた。地図の見方や景観の読み取りでは昨年の社会科の授業が役に立ったと思う。
U	1年生	2年生	授業ワークシートの評価A ワークシートにおける質問紙調査の記述「学校周辺を歩くことで，地図にはない発見が多数あったこと。」 冬季休業中の課題は思考･判断･表現がAで景観観察からまんべんなく広い視点で考察している。	個人での調査研究では，山城が多い戦国時代の滋賀県の城の中で，平城が存在した理由を調査し，街道が地理的要因になっていると結論づけた。 グループ研究では，「彦根城の強さを地形から探る」というテーマに対して，彦根城(彦根山)の地形図から立体模型を作り，「彦根城の地形的な弱さが防御の強固さ作り出した」と地形から考察をするのに，中心的役割を担っていた。 校外活動は実施していないが，授業者が過去に彦根城で巡検をした写真があったので，スライドで見せて校外活動に代えた。	彦根城の模型を製作するのに，昨年度の社会科の授業で学んだ等高線の読み取り方や縮尺の読み取りが役に立った。地図や，完成した立体模型からわかる建物の配置等を読み取り，自分たちが設定した「彦根城はどのように地形を生かした守備を展開しようとしていたのか」という問いにつながる考察ができた。
V	1年生	2年生	授業ワークシートの評価A ワークシートにおける質問紙調査の記述「身近な地域の立地と産業などの関係についてとらえ方が分かった。」 冬季休業中の課題は思考･判断･表現がA〇で主に地形に関する考察が見られる。	個人での調査研究では，滋賀県内の文化形成の相違に降雪量，気温といった気候条件が要因になっていることを資料から考察した。 グループでの研究では，「海と琵琶湖で起きる津波には違いがあるのか」というテーマに対して，過去の地震での津波の痕跡と地形を分析してリアス海岸部では注意が必要であると結論づけるのに，中心的な役割を担っていた。 校外活動は実施していない。	もともと地形や地域の様子，１年生の理科で習った津波のことについて関心があった。琵琶湖における津波の痕跡について分析する際に，高低差のわかる地図を見て琵琶湖周辺の高低差を読み取ったり，湖岸の入り組み方を読み取ったりするのに，昨年度の社会科の授業で学んだ地図による地域の地形の読み取り方が役に立った。
W	2年生	3年生	授業ワークシートの評価A ワークシートにおける質問紙調査の記述「地図を見てからフィールドワークに行ったから実感が湧きやすかった」 沖縄修学旅行のグループ別新聞では沖縄で体感した温暖さと土産物で売られているものの関連についての考察が見られる。	グループの研究では，「滋賀の城と人物の関係」というテーマについて，特に共通点を探ろうとした。近世の滋賀県で城を持っていた人物を挙げ，裏切りなどの下剋上から江戸時代になると主君を敬うように変わるという結論に達したが，これは滋賀県に限ったこととは言えず，地域的特色なのかという点において論の稚拙さが否めなかった。リーダーとして中心的役割を担った。 校外活動は実施していない。	城の位置を地図から読み取る上で，地図を見て言えそうなことを見つける時に，昨年度の社会科の授業が役に立った。また，昨年度は，地形図と照らし合わせて歩いたので，縮図に対して実感をもって研究を進めることができた。

観と違い」という評価が出てくる。2019 年度の 1 年生なので，冬季休業中の課題で自宅周辺の野外調査を実施しており，その成果が出ていると言える。また，生徒 T は，修学旅行のグループで国際通りの土産物店の景観の考察が見られ，観光に関する視点，とりわけ土産物店の景観に関して引き続き関心を持ち 2020 年度の BT に活かしていったことがわかる。

次に，生徒 U は，校外活動である野外調査は実施できなかったものの，授業者が過去に彦根城で巡検した写真があったので，スライドで見せて校外活動に代えた。実際に現地に行けなくても，景観写真を地図でつなぎ合わせ，空間をある程度把握できたために，彦根城（彦根山）の立体模型を製作し，景観を復元できた。この際に，2019 年度のワンポイント巡検で学んだ，景観と地図とをつなげる技能が活用できたと言える。立体模型を作ったことで，そこから地形と防御の強固さとを関連させて考察しているので，現地に出かけなくても景観情報から地域的特色を読み取ろうとしていることになる。また，生徒 U はワンポイント巡検時から一貫して歴史的な視点に関心を持っている。歴史の視点で景観を見るという訓練を続けた結果，BT において歴史的景観を立体模型で復原するという成果に至った。

生徒 S ～ W に共通するのは，野外調査をしたとしていないとにかかわらず，読み取りや分析，作成など，地図を活用している点である。地図の活用にあたっては，ワンポイント巡検の授業を通して読図の手法だけでなく，実際の景観と照らし合わせたことでイメージしやすかったという点で，地図の読み取り，イラストマップ（主題図）の作成など，2019 年度の「社会科の授業が役立った」としている。

生徒 V と生徒 W は，校外活動で野外調査に出たわけではなく，地図の読み取りのみを行った事例である。生徒 V は 2019 年度の冬季休業中の課題以降，地形に着目して関心を持っており，BT においても地図を読み取るなかで地形に着目して分析をすすめている。生徒 W は，沖縄修学旅行のグループ新聞では気候と土産物店の関連に着目した記述がみられるが，BT では歴史に着目した研究となっており，一貫性は見られない。より広い視野で地理的な考察をしようとしているとも言えるが，一つの視点についてフィールドを変えて追究することはないため，深い分析にはなっていないと言える。

以上のように，2019 年度のワンポイント巡検を含む授業で育んだ見方・考え方が，2020 年度の総合学習で活用され，一定の成果を挙げていることがわかる。とりわけ，地図の読み取りや，野外調査に出た場合の景観情報の読み取りからの地域的特色の考察が見られる。そして，それはワンポイント巡検やその後の冬季休業中の課題，または修学旅行における探究学習での課題において持っていた視点が継続される場合は，より活用して深い考察につながることがわかった。

しかし，これらはあくまで全 67 のグループのうちの一例にしか過ぎず，本来ならば逆にワンポイント巡検の成果を活用できていない生徒について，なぜ活用できていないかといった分析をする必要がある。ただ，新型コロナウィルス感染症の拡大に伴い本来意図していた BT になっておらず，校外活動に行っていない生徒が大半である。そのため，校外活動に行かずにワンポイント巡検の成果を生かせていないのは，ワンポイント巡検の持ち方に課題があったのかどうかといった分析は成り立たない点をふまえておく必要がある。

3. 成果と課題

本稿では，地理的分野の「地域調査の手法」においてワンポイント巡検を実施した上で，カリキュラム・マネジメントを意識して，その後の事後学習として校外学習や総合学習で「地域の在り方」の単元にあたる内容を扱い，身につけた見方・考え方を活用したり，探究したりさせ，地域について深く考察させる学習を実践し，地理的な見方・考え方を育む学習となったかどうかを分析した。その成果として，以下の 3 点が挙げられる。

第 1 に，1 年生の京都校外学習では，各グループの研究テーマから，ワンポイント巡検を実施しておくことで，訪問地をポイントとして捉えるのではなく，周辺や地域の景観を根拠として地域的特色を考察する生徒が増えたことが示せた。

第 2 に，2 年生の沖縄修学旅行におけるしおりの記述の分析からは，ワンポイント巡検で学んだことを活かして修学旅行での景観の読み取りができたことが示せた。また，グループによる修学旅行新聞をワンポイント巡検実施前の生徒作品と比べると，地域的特色をより深く考察できるようになったことが示せた。

第 3 に，総合学習 BT における抽出生徒の分析では，ワンポイント巡検を含む授業で得た見方・考え方を 2020 年度の BT で働かせ，一定程度の成果を挙げている生徒がいることを示した。とりわけ，地図の読み取りや，野外調査に出た場合の景観情報の読み取りからの地域的特色の考察が見られた。そして，それはワンポイント巡検やその後の冬季休業中の課題，または修学旅行における探究学習での課題において持っていた視点が継続される場合は，より深い考察につながることがわかった。

以上からまとめると，ワンポイント巡検を含む 3 時間の「地域調査の手法」の学習からその後の学習に継続していけば，地理的な見方・考え方をより働かせて，読図や景観の読み取りの技能を高め，地域的特色の考察を深められることがわかった。

しかし，新型コロナウィルス感染症の拡大により，休校となった期間を挟んだためにカリキュラムの継続性が薄まったり，野外調査等の校外活動が阻害されたりした。本来意図していたようなカリキュラム・マネジメントを意識した継続的な学習にはできなかった。コロナ禍が去り，意図する継続した学習が成立した際には，改めて実践して分析する必要がある。

また，この野外調査にかかわる単元の難しさは，ワンポイント巡検をする中学校の学習は，当該校でしか成立しない点にある。他の単元の学習内容なら提案された学習がそのまま他の中学校でも活用でき，多くの教員が実践することで深めることができる。しかし，図 1 で示した四つの視点を押さえることで地理的条件が違う学校でも実践可能である。具体的な提案については，別稿で述べることとする。

付記

本稿は，2020 年度に滋賀大学大学院教育学研究科学校教育専攻に提出した修士論文の一部を，加筆・修正したものである。作成にあたって滋賀大学教育学部の松田隆典先生には終始ご指導，ご助言をいただいた。感謝申しあげる。

注

1) 本稿で扱う「地域調査の手法」の単元は，2017 年版の学習指導要領における単元名である。2008 年版では，「身近な地域の調査」の中にその内容が含まれていたが，2017 年版では「地域調査の手法」と「地域の在り方」に分かれ，実施時期も別になった。
2) 七里広志「中学校社会科『地域調査の手法』に関する野外調査の実態と指導方法―地域調査の学習指導に関する質問紙調査を中心に―」，滋賀大学大学院教育学研究科論文集 23．pp. 61-72，2021
3) 岩本廣美「第二次世界大戦後の日本の地理教育における地域学習の展開と課題―中学校社会科地理的分野の単元「身近な地域」の扱いを中心に―」，人文地理 73-2，2021，pp.181-201
4) 松岡路秀・今井英文・山口幸男・横山満・中牧崇・西木敏夫・寺尾隆雄『巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践―地理教育におけるワンポイント巡検のすすめ―』，古今書院，2012
5) 前掲 3）p.195
6) 前掲 2）p.69
7) 八田二三一「中学校の『総合的な学習』における巡検型地域探訪と地理学習」，前掲 4）pp.153-163
8) 七里広志「探究的学習活動を通した，論理的・創造的な思考力の向上―総合学習 BIWAKO TIME を幹に，各教科での学びを深める学習―」，滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要 60，2017，pp.2 ～ 13
9) 本校の沖縄への修学旅行は 2020 年，3 泊 4 日の日程で実施しているが, 本稿における「沖縄修学旅行」は，その日程のうちの 3 日目に実施している野外調査を含むグループ別研修による探究的学習のことを指す。
10) 前掲 8）
11) 永田郁子「個の学び・協働の学びの中での『問い』を立てる力の育成―総合的な学習の時間『BIWAKO TIME』における生徒の『問い』の変遷から見えてくるもの」，滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要 63，2021，pp.130-137
12) 七里広志「調査研究型の総合学習が卒業後に与える成果に関する，卒業生への世代別追跡調査」，Web サイト『滋賀大学学術情報リポジトリ』（http://hdl.handle.net/10441/15446），2017 年，16p.，最終閲覧日 2021 年 11 月 14 日